

だから、党機関のWRONaとヤルゼルスキに対する憎しみが、社会のそれと同等か、時には凌駕するのは偶然ではない。

現在の第一書記は「第9回党大会〔81年7月〕路線の継承」をいくども繰り返し保障し、マルクス＝レーニン主義的レトリックをふんだんにちりばめる。にもかかわらず彼は、最も過激で反共主義的な「連帯」活動家さえ決してやっただけでなく、統一労働者党をないがしろにした。共産党にとってはいつでも最も重要で基本的な問題、つまり、権力執行方法をめぐる争いも起きても、統一労働者党中央委総会が若者の問題とか農業問題とかを討議している、あるいは1ヵ月か2ヵ月（問題が公けになるまで）開催が延期される。労働者活動家会議が開かれても、それを召集したのは統一労働者党ではない。おまけに、共産主義史上はじめて、党員ではない活動家がこの会議に加わっていることが判明する。政府は基本的な政治問題について委任と同意を与えられるが、その委任と同意の出所は政治局や中央委総会ではなく、WRONaからである。

党機関にとっては事態はさらに深刻になる。国家構成においてこれまでは「選り抜き」の共産主義者が占めていた地位、統一労働者党中央委員会委員のポストと同意語であった国家行政機関の椅子に軍人が座ったのだ。それも、軍出身であることを堂々と宣言して。こうした変化の一例としてはっきり目に見える結果が、各省のポスト、県知事や県書記の役職への軍人の侵略である。

軍は戒厳令のもとで統一労働者党を庇護し、党が再生されて独力で状況を制御できるようになれば兵舎へ帰る——この当初の宣言は早々に調子を下げ、その代わり、危機からの脱出は新しい、円滑に機能する、力ある国家構造の建設により成し遂げられるという声明が現われた……。

共産党権力を「8月」以前の形態に復元するつもりはない、お飾りの各種制度による旧体制に戻るつもりはない。WRONaはこうはっきりと声明しながら、その実、張子のあやつり人形（PRONとかWRONa製組合とか）をこしらえあげ、危機に疲れた社会が手がかりを求めてほしいにゲームへの参加に同意してくることを期待している……。では、現在のポーランド人民共和国はいったい何なのか？ 党国家としては崩壊し、

しかもなおWRONa国家として再建されたわけでもないとするば。誰がポーランド人民共和国を統治しているのか？

WRONa体制はその外見とは異なり、古典的な軍事独裁ではない。国民救済軍事評議会〔WRONa〕を構成する人物たちが事実上軍事政権に参加しているのかどうか、われわれは知らない。しかし、「ワイカ」として有名なヘルマシェフスキ大佐のような人物が相当数ふくまれていることからして、WRONaはかなりの程度象徴的な性格の団体であると考えられる。

現在のWRONa体制を最も適切に規定できるのは、破産した党国家—ポーランド人民共和国の任命制暫定政権としてである。党国家における制度にとって代われるほど強固で安定した政治システムをWRONaは創造できなかった。人事面でも制度面でもヤルゼルスキの一派は、軍隊は別に、寄せ集めであり、それは8月革命以前の体制のいくつかの要素が必要だという理由から一時的に合同したものすぎない（一部は党中央機関、一部は経済および国家行政の機関、一部は政治警察）そのため、旧体制のいくつかのグループは、ヤルゼルスキの一派の外部からも、内部からも異議をとる……。



A・マチュレヴィチ

## 何を基礎に建設は可能か

あとに残るものは何か？ 不変なものは？ (国家再建を) 望むならば何を基礎にそれは可能になるのか？ 何がすでに実現しているのか？ 党国家は崩壊した、だがWRONが創造できたのは単なるお飾りにすぎないのか？ 言葉を変えれば、拒否と抵抗から創造の仕事へ移行するにはポーランド人は何をめざすべきなのか？

—「グウォス」は教会、「連帯」、軍の3者を国民生活にとって最高に不変の仕組と認める。教会については次のように言う。

しかしながら、ポーランドにおける教会・国民・軍の関係には優れた特質がある……。その特質の源泉は、ポーランドが事実上独立を失って以来250年のあいだに教会が表現しつづけてきた国民の運命やそのあるべき姿についての深い思想の中にある。ヨーロッパ中西部のポーランド人によって占められている地域では、国民の意志とはほとんど関係なく、つねに政変が起きている。このことを教会は認識し、そしてそこから長期的展望に立った結論を引き出しているように思える。国家、軍隊、政党、労働組合、行政機関、学校——これらをポーランドは獲得し、失ってきた。しかし国民は残った。そして、最悪の時期(決してまれなことではなかった)でさえも国民は教会の支持を見い出せた……。こうした状況において教会は、福音者としての使命のほか、まず第1に、国民にとって最も重要で基本的な仕事に携わらざるをえなかった。それが国民のアイデンティティの保護である。なぜなら、独立国家はたとえ失ってももう1度からとることができる。しかし、国民としてのアイデンティティを失えば、それは2度と手に入らないのだ。ここから教会の賢明な最小限主義とひかえめな政治綱領が出てきた……。

「教会教義の基本命題」は国民の政治的、地政学的経験とみごとに調和した。侵略国家の枠内、すなわち、形式上はポーランドだが、国民の希求とは対立する国家一歩制の中で10年の歳月を過ごさなければならないポーランド人にとってこの体制との「関係の持ち方」は根本的な意味を持つ。教会は国民のアイデンティティ保護の制度上の保障である。それにしても国民と教会は、現在の国家がいかなる国家なのかについて無関心では済ま

されない。たとえ押しつけられたにせよ、国家の形態は国民生活にとってきわめて重大な一連のものごとを決定するのだ。

10年間の展望で考えれば、いかなる国民であれ地下活動や抵抗、武装闘争、亡命などで生きのびることはできない。屈従を強いられている国民にとってそれが心要であるにしても、いつかは必ず、それ以外に、土地を耕し、子供らに洗礼をほどこし、若者らには教育を授け、工場を建て、そこで働くことが不可欠となる。このような活動や、その他いま名を挙げなかった社会生活を共に構成する多くのことがらは、ここでとりあげている国家構造の性格とも、社会と教会と国家の関係の性格とも密接に結びつく。

ポーランド人に押しつけられた国家形態を国民生活にとって最も望ましいものにしようとしながら、そしてまた、その目的をめざす努力を支持しながらも、同時に教会は押しつけられた国家との暫定協定締結をも拒みはしない。教会は可能なことに力をそそぐ。

ポーランド国民の希求、数10年にわたる共産主義の経験、その経験から引き出した共産主義に対する判断、これらの統合体として「連帯」は生まれた。これを亡きものにするには、構造的、そして直接肉体的に今日の世代を抹殺しなければならないだろう……。共産主義の経験、ポーランドにおけるこのまったく新しい形式の独立喪失はおそらく他のどこにも例を見ないであろう。これは単なる独立喪失とか占領とかの経験ではない。これは祖国の収奪なのだ。収奪はポーランドの政治に携わる人々のみならず、すべての人々に、労働を含む共同生活のすべての面に及んだ。独立喪失の共産主義的形態は、共同体の要となる最も普遍的な機能—労働に最も深く食いこんだ。それゆえ、祖国を収奪されたポーランド人の反発が「連帯」—働く人々の大規模な独立運動となった。脅威が強いからこそその強い反発だった。したがって、ポーランド独立の鍵はポーランドの労働の独立にあると言える。

この課題に「連帯」の組織形態はすばやく適応した。「連帯」内の部門別セクションと職業別セクションは伝統的組合組織に該当し、地方別の本部と全国にまたがる組合組織系列は擬似国家として機能した……。

「連帯」の組織構造は1981年12月13日に破壊され、将来同一の形態、同一の構成で再生できるとは想像するのも難しい。それは間違いない。しかし「連帯」の経験、ポーランドの労働国家の経験は残った。この経験を基盤にしてのみ建設はできる。それゆえ、「前への退却」＝「連帯」完全断念の試みは流産したものと認めるべきである。たとえば、時を12月13日以前に戻すこともかなわず、地下政党創設も不可能であるとしても。政党はいつの日かポーランドにとって必要になろう。しかしながら今日では、80年8月に提起され、81年12月に先鋭化した2つの基本的問題、すなわち、ポーランド国家の問題とポーランドの労働の独立の問題解決にとってそれはふさわしい条件とは言えない。

「連帯」は組合法国として誕生した。それをいま、同じ形で合法的に再生できるとは思えない。しかしそれがポーランドの労働独立の問題を解く鍵であることは今も変わりがない。国家問題の解決は今日では他の分野を探し、他の方法を適用すべきである。しかしその方向への基本的な第1歩は労働組合としての「連帯」再建であるべきだ。この考えを放棄してはならない、妥協の価値がないと言ってそれを無視してはならない……。

セイム〔国会〕のないポーランドは想像できる——それが今日のように国民に冷淡なものであれ、あるいは民主的に選出されたものであれ。だが、このヨーロッパでわれわれが占めている場所において軍隊なしにポーランドの独立が保てるとは考えられない。統一労働者党、SB〔政治警察〕、PRON〔国民再生愛国運動〕、WRONa、形ばかりのセイム、そして国民評議会〔地方議会〕——これらは国にとって必要ではない。民主的に選出されたセイム、そのセイムにコントロールされる行政機関、本物の地方自治ならばポーランドの独立にとって必要であろうし、主権の限定された国家においても熱望されよう。だが、独立の保障となり国民の欲求を満たす最高機関となりうるのは、国民に奉仕し、国民を守る軍隊のみである。

統一労働者党やWRONa、PRON、SBは、もし条件が整えば、適当な手続をとって解体もできる。政党、労働組合、各種社会団体、さまざまな協会も社会の人々の努力でつくれる。しかし軍隊の創設は、社会運動によっても地下活動によっ

てもできることではない。かのエゼフ・ピウスツキがポーランド軍団〔Legion Polski〕とポーランド軍事組織〔POW〕を組織したことはある〔ともに1914年〕。これらが重要なのは政争の切り札としてである。POWには戦争開始を可能とする武力要因として、あるいは暫定的防衛の組織化面で大きな功績があるが、軍事的な解決の決め手となったのは、亡命先、また国内で、かつての占領軍の前線や参謀部にいたポーランド人将校が創設した軍隊だったのだ。

同様に、将来の独立ポーランドにおいても（その日がいつかは来るとわれわれは信じている）、独立のために戦い、それを守るのはポーランド国軍であろう。なぜなら、現在の軍隊以外にポーランド国軍を直接的に、また人的に継承するものはありえないのである……。

軍の参加を抜きにしては独立の獲得は考えにくい。いかなるポーランド国家になろうとも軍隊は不可欠である。もっともそれはかなりの程度まで共産主義体制のもとで形成されるだろう。だがはたして、国民の独立した労働のためには軍隊の参加だけが解決の道なのだろうか。なにしろ今日では当の軍隊は支配の基本的道具であり、国民再生の過程を血まみれの手で野蛮に押しとどめた支配者たちの援護にもっぱら回っているのだから……。

軍隊を敵に回せば、必然的に、あからさまな介入、つまりポーランド「正常化」を招く内戦とならざるをえない。そうした結末に至らないまでも、軍との正面衝突はポーランドの国力の基本要素を弱めるおそれがある——軍隊が国民とは完全に無縁となり、市民の自立した社会組織（公然も非公然も共に）は崩壊するだろう。それゆえ、国民と権力の対立、すなわち、ポーランド人とWRONaの対立が国民と軍隊の対立を意味する事態を許してはならない。ポーランドの社会で活躍する成年男子の大部分は、レフ・ワレサのように伍長であったり、あるいは兵卒、予備役将校なのだ。

軍隊とは軍事的かつ政治的勢力であり、それは何よりもまず司令官（少佐以上）委員をさす。将校団のいわゆる「党化率」は100パーセントにのぼり、将軍になるには2、3年のあいだソ連のフルンゼ大学に留学しなければならない。疑問がわく……ポーランドやチェコ、ハンガリーの将校たちがそこへ出かけるのは、かれらの母国には得

られない軍事上の知識、技術を習得するためなのだろうか？ そのでの学問の基本目的はむしろこれらの「銚け」、つまりワルシャワ条約機構を指揮する統合機構への組み込みであり、謀報活動、社会活動、心理操作の学習であり、そして、何よりもまず、ソ連の軍事力に対する畏怖の植えつけなのだ。帝国の将校たちは、その中枢部に2、3年滞在したのち、心理的にも知的にもすっかりソ連化してそこを出てくる。

このことが、属国の軍隊内に民族自立の風潮が現われないための保障要因としてどれだけ有効なのかを評価するのは難しい。しかし、いずれにしろ、1956年のハンガリーと1968年のチェコスロヴァキアにおいて占領軍に協力した自国の軍人たちはほんのわずか（それも高い地位の者たちだけ）でしかなかったという事実がある。

軍がいずれの政治セクトにも片寄らず、国民の頼みに沿った政治勢力として登場することが果して可能なのだろうか？ 可能であるという確信はまったくない。しかし今日、軍はこの選択の前に立っているのだ。

この選択は、さらにはっきりと正確に、こう規定できる——軍はこれからもなおWRONAを支える主要基盤として国民相手の戦争をつづけ、そのあと政治の表舞台から去り兵舎へと戻って、またもや党機関の従属物となり「仕事を終えたゴ-

スト・ライターは去らねばならぬ」という扱いを受け入れるのか、それとも、みずからの政治的立場を維持、強化するのか。後者ならば、教会および「連帯」と協定を結び、第3の勢力、国民の真の——武装した！——勢力となれるのだ……。

ポーランドの国民は生まれかわり、政治的にめざめ、「連帯」の成功を記憶にとどめ、かつ、いまなおその中で生きている。この国民の意志に反して国家を建設するすべはない。あえて押し通せば社会はそのふところから武装闘争をもち出すだろう。それはまたきわめて正当なのだ。インフレーション、配給券、店での行列は肉体的テロルの代わりを果たす。社会の人々の疲労ははかり知れない……。

ポーランド人が目の前にしているのはこのような国家の建設であり、そこでこそ国民は自由に生き、発展できる。そうした国家ならば国民も協力できる。その国家ならば——確実な独立には至らなくとも——かなりの程度まで国民の利益を守り、独立獲得のための仕事を準備するだろう……。

〔以下次号〕

〔「連帯」パリ通信第72号（83年9月28日付）

訳：篠崎誠一〕

黒板上の貼り紙は、ZOMO（警察機動隊）に入ることは人民の中に入ること、というキシチャク將軍（内相）のスローガン。黒板には「七月二日—戦争（戒厳令）の終了」とある。下のは隊員のつぶやき。俺だってこんなことイヤなんだ。でも考えてみよう、失業だけはしっこないんだぜ！



- MNIE TEŻ PRZYKRO, CHŁOPCY... ALE PAMIĘTAJCIE, ZE U NAS BEZROBOCIA NIE MA I NIE BĘDZIE!

# 病院なんかで死にたくない……

——祖母の看病日記より——

ラファウ・ドンブロフスキ

Cheć umrzeć w domu... Rafał Dąbrowski  
"Kultura" No.10/433, 1983.10, Paris

【編集部より】 現代ワルシャワ病院事情——。以下、お読みいただければそのグロテスクなまでのむごたらしさに唖然となさる方も多かろう。むろん、いわゆる第三世界諸国と比べればこれでも良い方という言い方もできなくはなからうが、しかし、「発達した工業国」を自認する「社会主義」国の首都の病院でこうした状態であるとすれば、この国の国民に対する基本姿勢が疑われても仕方あるまい。

“私は黙ってられない”  
レフ・トルストイ  
“人間が、人間に、この運命を課した”  
ソフィア・ナウコフスカ  
『メダリオン』

——母に捧ぐ

1982年10月15日

今日は聖テレサの日。祖母の“名の日”(訳注)。昨日、意識不明の祖母を病院へ運び込んだ。玄関の間で床に倒れたのだ。私たちがドアを開けて発見するまでの約2時間、祖母は倒れたままでいなければならなかった。助けを呼んだろうが、唯一の隣人は年寄り夫婦で自分の家の呼び鈴さえ聞こえないほど耳が遠い。救急隊は電話して3時間後にやって来た。重症の肺炎と言われた。80歳という年齢にとってはその意味するところはひとつ。即刻入院させねばならなかった。だが救急隊の医師は「空きベッドはない」と言う。母は知り合いの医師や病院に片っ端から電話した。無駄だった。同じ病院に三度電話して、3度目にやっと許諾を得た。

今日、母と一緒に、ツァーリの時代に建ったらしいその古い汚ない建物を訪ねた。壁のしっくいのはげ落ち、窓ガラスには穴があいていた。「面

会時間 15:00~18:00」と掲示がある。うす汚れたシャツを着た爺さんが門衛室から出て来て、飲みすぎでしわがれた声でどなりつけた。

「通行証! 通行証出して!」

通行証など持っているわけがない。母は、「病気で意識不明の母に面会に来ました」と説明する。母は泣き顔になる。

私は言った。「だってもう3時15分ですよ。面会時間でしょう。ちゃんとここに書いてあるじゃないですか」 掲示を示した。

「わしの知ったこっちゃない。規則が変わったんだ。通行証がなくちゃならねえ。持ってないんなら——とっとと帰んな!」 しゃがれ声の門衛はがなった。

私は20ズウォティを彼に握らせた。彼はわきへ寄り、黙って私たちを通してくれた。泥で汚れたはめ木の床を通り、2階へ上がった。廊下にベッドが並んでいた。産科病棟。階段わきの病室からうめき声と叫び声が聞こえた。看護婦のきびしい声がした。

「ここに来たんだから、もう騒がないの! なに大声出してるの!」

3階へ上がった。ここの廊下にも所せましとベッドが並んでいる。一番遠くの端に祖母はいた。点滴を受けながら意識不明で横たわり、ベッドから両手が力なく垂れている。針のさし方がまずく、手首に傷ができています。シーツもカバーも薄汚れ

てほころびがある。昏がかさかさだ。母は看護婦か看護助手の姿を捜す。誰もいない。私はそばの病室へ入る。看護婦を一人みつけた。祖母の口を湿してやってほしいと頼む。が、相手はこちらを向きもせず答えた。

「今それどころじゃありませんわ。もっと大事な仕事をしているんです。体温計を配るっていうね」

「それなら誰か他の人を呼んでくれませんか？」

「他の人なんていませんよ！」 女はびしゃりと言った。

「今日は土曜ですよ。もうみんな帰りました。私もじきに帰ります」

「そういうことなら、ガーゼを少しもらえませんか」

だがガーゼは手に入らなかった。備品管理係の女性も帰った後だったからだ。どっちみち今日の分の割り当てはもう残っていなかった。私は洗面所へ行った。どす黒く、べとついた床。尿の臭いがした。壊れた蛇口から水が流れ出ている。黒く汚れた洗面台。私はハンカチに水を含ませた。

#### 10月16日

日曜日。祖母は依然意識を取り戻さない。日曜の病院は誰もいない。暖房も切られていて寒い。開いた窓からベッドの祖母に風が吹きつける。祖母のベッドをずらし、窓わくに昇って窓を閉めようとしたがだめだった。〔二重窓の〕内側は枠がひどく曲がっているし外側にはガラスがない。隙き間にトイレットペーパーを詰めた。隣のベッドに付き添っていた女性が愚痴をこぼす。

「私はね、日曜日しか母の世話に来れないんです。午後が勤務時間なものでね。だから日曜以外母のそばには誰もいないんですよ」

#### 10月17日

今日医者に話を聞いた。容態は絶望的。肺炎に膀胱炎を併発しているという。母は医者の言葉を反響している。

「患者にとってもあなたがたにとっても、ぼっくり死んでいた方が良かったんだろがねえ。いずれにしろ時間の問題です。もっても数日ですな」

母は泣いていた。私たちは祖母の所へ行った。ベッドの下に尿の水たまりができていた。看護婦も看護助手も誰一人近寄ろうとしない。言っても

返事はいつも同じだ。

「手を汚したくありませんからね！」

母はちょうど廊下を通りかかった看護助手に歩み寄った。感じよい顔付きの若い女だった。母はそっと彼女の手を500ズウォティをすべりこませた。看護助手は紙幣に目をやると祖母のベッドへやって来た。ベッドの下の尿をふきとってシートとガーゼを替えるのを手伝ってくれた。濡れたシートに寝ていたため、祖母は身体中に床ずれが出来ていた。そうした炎症には軟膏をぬってガーゼを当てねばならなかった。母は看護助手に、明日私たちが面会に来る前にも祖母に同じような手当をしてやってほしいと頼んだ。看護助手は一言も答えず足早に去った。彼女が去ったあと、片足を切断した老婆が松葉杖と杖を頼りにびっこをひきひきこちらへやって来た。

「奥さん、なんであんなに渡したのさね。今日渡す分は今日の仕事に対してなんだよ！ 明日はなんにもしてもらえまいさ。1回ごとに払わなきゃならないのさ。でもそんな金持ちがどこにいるもんかね！」

#### 10月18日

祖母は相変わらず廊下に寝かされているが、今日は病室へ移れる約束になっていた。看護助手は実際祖母に何もしてくれていなかった。別の看護助手に頼み、前払いせねばならなかった。点滴器から祖母の腕までつながっている細い管は、古くて穴があいていて漏れる。だが物資不足でワルシヤワ中、いや国中を捜しても管の替えはない。祖母の身体の床ずれはますますひどくなっている。意識は依然ないが、短い間ひどく苦しそうな様子を見せることがある。隣のベッドの女性がこう教えてくれた。ゆうべ廊下を通りかかった司祭が祖母のかたわらで祈りを上げ、聖油を塗っていったという。つまりもう最後だということだ。誰にも理解できない最期の時。

#### 10月19日

まだ病室に空きができない。いつもと同じ儀式の繰り返し——看護助手、お金、シートの交換、床ふき。他のいくつかのベッドの下にも尿の水たまりがある。濡れたシートに寝ている病人たちがうめく。祖母はまだぜいたくな方だ。祖母がよく

言っていた言葉を母が思い出したように口にする。「私はね、家で死にたいよ。病院じゃなく、家で。病院だけはまっぴら！」今ようやくその本当の意味がわかった。祖母がうめく。ひどく苦しそうだ。よく聞きとれぬつぶやきをもらす。何かロシア語でも言っている。私たちにはわからない。祖母の言葉がわからない。夜の世話を看護助手に頼む。そばについていてやってほしい、と。一晩の値段はすでに1000ズウォティになっている。

#### 10月20日

祖母は相変わらず廊下にいる。今日は少し意識をとりもどした。ほんの一時私たちに気づいた。笑いかけてくれた。ただ、今日一緒に来ていた私の従兄弟のことはわからず、彼を私の父と勘違いした。1時半だった。いくつかのベッドに昼食の盆が運ばれていた。鶏の手羽先とジャガイモと何か透明なスープが乗っている。通りがかった看護助手に、今日は自力で食べられるかもしれない祖母になぜ昼食が出ないのかと聞いてみる。目つきの悪い年配の女だったが、肩をすくめただけで行ってしまった。そこで私は調理室へ行った。傷がついたりへこんだりした汚れた食器が山と積まれ、曲がったり折れたりしたナイフ、スプーン、フォークが置いてある。黒く汚れた流しから悪臭が漂う。破れた前掛けのでっぴり太った女調理人に祖母の昼食を頼む。

「でも今日はあの患者さんの分は、いらないうことになってます」私の方を向きもせず女はそう答えた。

「なぜいらないうことになってるんです？」私は尋ねた。「今日は意識を取り戻して、少し食べられるんですよ！」

返事はなかった。女はのろい動作で皿に少しジャガイモを乗せ、窓ぎわにある容器から手羽先をひと切れ取り出した。私はその皿を持って祖母のところへ戻った。食べさせた。冷めた食事で彼女の食はすすまなかった。家から持って来たオレンジをしぼり、その汁を少し飲ませた。片足のない老婆がまた近寄って来た。彼女の名はゴンショロフスカ夫人といった。しぼったオレンジに目をやり、母に話しかける。

「あなたのお母様はいいねえ。他の患者には誰も見舞にも来やしない。この私なんか、誰も来な

いくちさ。亨上は蜂起で死にしまった。子供も親兄弟もひとりもない。ああ、1週間も前に私は看護婦に頼んだもんさ、オレンジかレモンだけでいいから買って来てちょうだい、って。「ありません」ときたもんさ。ねえ、あなた買って来てくれないかねえ」そう言って哀願するような目で母をのぞきこんだ。

結局、明日レモンを持って来ると約束した。もちろん、うちで買い置いたやつだ。

#### 10月21日

今日は私ひとりで祖母につきそった。朝、点滴がはずされた。誰か他の患者に点滴が必要になったのだ。はずした途端に再び意識不明になった。輸血がされたが意識は戻らなかった。今はまた点滴がついている。夜の間誰も祖母に寝がえりをうたせてくれなかったため、床ずれはひどく悪化し、何ヶ所かはリンゴがはいる程の穴になっている。今日は、床をふき、シーツとガーゼを替えるのを看護人が手伝ってくれた。青年で、医学を学びながら病院でアルバイトしているという。彼はあけひろげにこんなことを言った。

「それでね、皆が言ってますよ、ここの状態は第二次大戦中より悪い、蜂起の時の野戦病院の方がましだった、って」

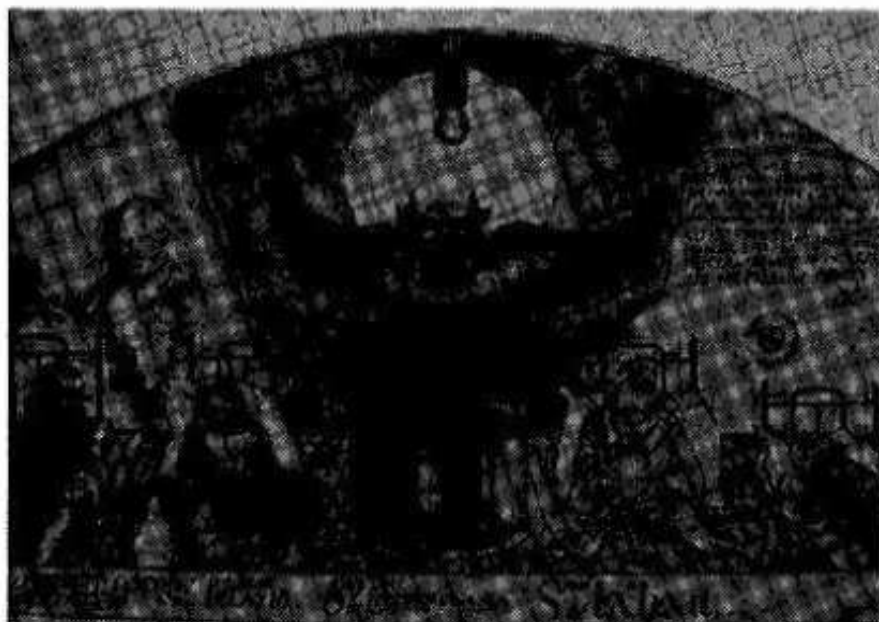
今日はお金がなかった。彼に手伝いの礼としてタバコとチョコレートとコーヒーの包みをあげた。あげる物の何もない人たちのことが頭をよぎった。この青年は、この病院で会った人のうちで初めて私にありがとうと言った。

ゴンショロフスカ夫人は私に、もう祖母のために夜の付き添いを頼むのはよすように言った。「だって看護助手なんて全然何もしてくれないんだからね。寝てるか編物してるかさね。いくらうめいてたって、寝がえりをうたしてやろうなんて気はありゃしない。唇をしめしたり飲み物をやったりさえない。今朝がたはだあれもいなくなっちゃった。みんな家へ帰ってさ。お金払うだけ無駄なことだよ」

約束のレモンを彼女に渡した。やはり看護助手に夜の世話を頼んできた。

#### 10月22日

今日で1週間目。医者は、肺炎と膀胱炎は治っ



病院のように見えるが実は拘禁者が描いた収容所の絵

だが、長期間点滴で抗生物質を与えたため、身体の衰弱がはげしいと言う。祖母は心臓が強いとも言った。私が「治る見込みがあるんでしょうか」と聞いたのに対しては、何も答えなかった。

医者にコニャックを1本差し出した。医者は、口では「そんな気づかいはご無用」と言いながら、受け取ってさっさと戸棚にしまった。

今日は3人で付き添った。母と、ヴロツワフから来た母方のお婆と私。家からシーツ、タオル、ガーゼ、それから飲み物と食べ物を持って行った。(飲み物と食べ物は万一人用になった時のためだ。なぜなら祖母はもう何も口にしない) 祖母の熱を計ろうと思い、看護婦に体温計を借りようとした。最初はお婆が、次に私が頼んだが、らちがあかなかつた。とうとう母が、家から持ってきた“予備の”イギリス製ココアの箱を手に看護婦のところへ行った。母は体温計を持って戻って来た。高熱だった。もう6時で、私たちは帰らねばならなかった。階段を下りている時、調理室から大きな荷物を持った女が出てきた。両手に下げた袋はロールパンにカッテージチーズの瓶、その他缶や容器やらでいっぱいだった。

#### 10月23日

8日目になってようやく祖母は病室に移された。ここも窓がきちんと閉まらず、紙や新聞紙をつまこまねばならない。廊下にいた時と同様、これを毎日しなければならぬ。というのも毎朝看護婦が換気に窓を大きく開け、詰めてある紙を捨て、

その後もとどおり閉めもしないからだ。祖母のベッドはぐらぐらした。足の1本の下に紙束をあてがわねばならなかった。

祖母のわきに立っていると、白髪まじりでのよったひどくやせこけた女が寄って来て、愛想よく話しかけてきた。

「私、エクレロヴァといいますの。お会いできてうれしいわ。あとで踊ってみせてさしあげるわ。あなた私と踊ってくださる？ だって……だって私には誰もいないんですもの……」 彼女は泣き出した。

私は静かに彼女の手をとってベッドへ連れて行った。そしてこう言った。

「お婆さん、落ちついて。万事うまくいきますよ。踊ったりしちゃだめです、横になってなきゃ。お婆さん、さあ横になって」

老女はもがき、叫んだ。

「どうして私がお婆さんなの？ 私はエクレロヴァよ。ひとりぼっちなのよ。私には誰もいないのよ」 また泣きだした。

この病室はほとんど年寄りの女性ばかりだ。大部分が重症の動脈硬化。エクレロヴァは精神科に空きができるのを待っている。もう2ヵ月待っているという。

#### 10月24日

今日も3人で付き添った。祖母はずっと意識不明。祖母に飲み物をあげようと思ったが、家から持って来たすいのみがない。見ると、エクレロヴ



アの棚に乗っている。エクレロヴァのところへ行き、

「あなたは間違えて祖母のすいのみを持って来られたようですね」と言って、すいのみを取った。

彼女は驚いたように私を見つめたが、取り返そうとはしなかった。ただ、こう尋ねた。

「じゃあ私のはどこ？」

手を腰にあて、ひじを張って、疑わしげに私を見る。

「あなたはこういうものは持っていませんでしたよ。普通のコップで飲めるんですから」

「持ってなかったですって？ 持ってたわよ、それとおんなじのを！」

彼女は乱暴に捜しまわりはじめた。ベッドの中、ベッドの下、棚の中、しまいには隣のベッドの下にもぐりこんだ。隣のベッドには意識のない女性が横たわっており、わきには点滴を下げた支柱が立っていたので、私はエクレロヴァを引きずり出さねばならなかった。彼女が支柱を倒してもしたら大変だ。それにどっちみち自分では出られなくなっていた。ベッドの下が尿で濡れていたの、私は彼女をふいてやろうとした。

「さわらないでよ！」 彼女は叫んだ。

病室には20のベッドが隣りあわせに並んでいた。いくつかのベッドからうめき声が聞こえてきた。だが誰もやって来ない。誰も病院の人間はいないからだ。

ゴンショロフスカ夫人もこの病室に運び込まれてきた。

#### 10月25日

祖母の容態は変化なし。3人で付き添う。例によって看護助手相手の儀式ひとつとおり。その後祖母の身体をタオルでふいた。おぼが祖母の口に飲物を含ませる。祈る。隣のベッドには相当重傷のパーキンソン病の女性が寝ている。わきに座った彼女の夫がこぼした。

「明日退院させられるんです。女房を置いておく場所はないと言うんです。これ以上置いておけないと。女房は自分ではもう何もできません。ベッドから落ちても自分ではい上がることもできないんです。でも私は動めに行かなけりゃならないし、付き添いの人を頼む余裕もない」

隣のベッドの女性がうめいた。水を欲しがって

いる。私はコップを持って彼女のベッドに近づいた。90歳の老婆だった。細くて小さな腕をベッドの金属棒に包帯でしばりつけられている。首を傾けて私に感謝を表わした。

病室を出る時私たちは大きな水たまりのようになった汚物を避けて歩かねばならなかった。誰かが吐いたのだ。自分の足で歩ける患者がそれを靴底につけて病室中に広げる。

ドアが開いて看護助手が夕食を持って現われた。黒い目の女、酒の匂いをさせている。夕食はロールパン1個、マーマレード少々にバターの小さなかけらだ。

#### 10月26日

祖母はほんの少し意識を取り戻したようだ。ひどく苦しがる。床ずれが痛むのだ。1日に何度もガーゼを替えねばならない。トイレへ行きたいと言う。祖母の気を静めさせようと努める。母は小さなスプーンの上で鎮痛剤を溶かし、用心深く祖母の口に注ぎ込む。私は見ていたがおぼは目をそむけた。

隣のベッドにはパーキンソン病の女性にかわって、別の、やや若い女性が入っている。悪性の癌。ほとんど断末魔の苦しみとあってよい。足元に座っている夫に悪態をつく。

「このろくでなし！ 何だってここに来たの！ 行っちまえ！ あっち行ってったら！ ちくしょう！ なんであの時ルヴフなんかへ行ったのさ。……」

夫の方は黙って床を見つめている。ゴンショロフスカ夫人が近寄り、杖にもたれかかって冷たく言った。

「そんなに大声たてないでおくれ！ ご亭主が来てくれるだけでも有難いとお思いよ……。今はご亭主はあんたのそばにいるんだ……」

男が急に彼女の言葉をさえぎった。

「ほっといて下さい！ 女房は死にかけてるんだ……。好きにさせてやりたいんだ……」

ゴンショロフスカは向きを変え、私の所へやって来た。

「バヴラクさんに尿瓶しづんを持って行ってやってくれないかね。もう1時間も前から欲しがってるんだよ」

「なぜ看護助手に頼まないんです」私は尋ねた。



「彼女の息子が看護助手にちゃんとつけとどけたと思うかい？」

私は尿瓶を取りに行った。途中で看護婦に行き会った。

「どうしてこんなに看護婦や職員が少ないんです」と訊いてみた。

「先週、看護婦1人と看護助手2人がアル中を理由にくびになったからです。薬品庫のアルコールを洗眼用の器で飲み干してしまったので」

「それならなぜ別の人をかわりに雇わないんです」

「今どきこれっぽっちのはした金で汚物にまみれる仕事をする人なんてどこにもいませんよ」

#### 10月27日

はじめのうち祖母は意識があるようだった。身を傾けた母に何か小声で話しかけさせた。母が理解できたのはほんの一言だけだった——「おまえたち、どうやってやりくりしてるんだい……？」それからどうやら父のことを尋ねたらしかった。そして再び意識を失った。おばは祈りはじめた。

癌の女性は昨晚亡くなった。彼女のかわりに感じの良い老婦人が入った。誰に向かっても微笑みかける。重症の動脈硬化だった。トイレに行くのを忘れていた。彼女のベッドのまわりはひどく臭う。私は尿瓶を持って行ってあげた。彼女は微笑んで、「要りませんわ」と言った。

こんな

#### 10月28日

今日は祖母は朝から全く意識不明。ガーゼを替えている間苦しそうな声をあげる。いつものように3人で付き添う。エクレロヴァが寄って来て言った。

「ねえ、この汚ない婆さんをいつ墓場に運んでくんだい」言いつつ祖母を指さす。

「よくそんなこと言えるわね！ まだ生きてるのよ」母は叫び、泣きだした。

「でも、生きてるって、どんなふうによ？ 苦しんでるだけじゃないよ」

そのあと彼女はつけ加えて言った。

「私ね、今日窓から飛びおりるの。それできれいさっぱりよ」

いわくありげに私にウィンクしてみせる。

私は窓を閉め、彼女をベッドへ連れて行かねばならなかった。通りがかりの看護助手が私に向かって叫んだ。

「そんな顔のおかしな女のことは放っておきなさい。飛びおりたきゃそうさせればいいのよ。そうすればようやく永遠の平安に至れるんだから」

隣のベッドの老女が大きなうめき声をあげている。叫ぼうとするが叫べず、歯をくいしばっている。息をするのも苦しそうだ。私は近寄った。彼女の上に身をかがめた時、彼女は力をふりしぼって言った。

「予……手……」そして、腕をベッドにしぼりつけている包帯からはずそうと動かした。

包帯が腕にくいこむ。

「しっ、静かに……。看護婦に聞こえますよ」

私は彼女の腕を自由にし、氷のかたまりのような手のひらをマッサージしてやった。老女は落ち着いてきた。息を深く吸い込み、正常に呼吸しはじめた。

「ごめんなさいね。厚かましいお願いをして。でもとても暖かい手をしていらっしやるのね。とても気持ちいい……。もう少し私の手を取っていただけませんか？ そうしてもらえるととてもうれしい……。ありがとうございます。ご親切な方ね……。本当にありがとうございます……」

小さな、寒さにごごえた彼女の手を私はしづかに握っていた。

彼女は言葉をつづけた。

「ご存知かしら。私はこの病院に、戦前も入院し

てたことがあるの。胆のう炎。そのころはここの様子は全然違っていたわ。看護婦さんたちも違ったし……。あのころは本当に違ってた……。コルネット〔慈善尼僧団員のかぶる大きな白いかぶりもの〕をかぶって……」

「修道女の」私はつぶやいた。

「そう、修道女のね。どんなにいい人たちだったことか」彼女の目に涙が浮かんだ。「どんなにやさしい人たちだったことか。ひとりの看護婦さんなんかは、『火と剣』〔シェンキェヴィチの長篇歴史小説〕を全篇読んできかせてくれたほど。はじめからしまいでよ。もちろん勤務時間中じゃなく、仕事が終わってから。仕事が終わったあとも看護婦さんたちは病院に残っていたものよ」

やがて小声でこう頼んだ。

「ね、どこかにこの話を書いてちょうだい。私たちのことを。私たちがここでどう扱われているかを……」

どこに私はこのことを書こう？ 新聞は経済改革や一連の計画の達成についてばかり書いている……。

#### 10月29日

私たちが行く前から祖母の死の苦しみが始まっていた。祖母のベッドの下には尿の水たまり。私たちがいないときには誰も全く祖母の世話をしてくれなかった。祖母はひどい苦しみようでうめいていた。母が祖母の手を握った。私は祖母の額の汗をぬぐった。おばは唇をしめしてやった。私たちが死に瀕した者のための祈禱を唱えた。

そのことが起こった時、私たちは長いことそれをのみこめなかった。私たちは沈黙した。それから母とおばが泣きだした。私は2人を抱きかかえた。ゴンショロフスカが杖をついて近寄ってきた。「お教えするけど、遺体はすぐに運び出すのよ。夕食時に不衛生だからね」

「あっち行ってよ、この婆あ」泣きながらおばが叫んだ。

ゴンショロフスカは身を引いた。母は祖母のまぶたを閉じた。おばが言った。

「あごを閉じておかなきゃね。そうしないとあとで開いたままになってしまうわ……」

私たちはあごを閉じて固定した。祖母にはまだぬくもりが残っていた。祖母の少し黄色くなった

歯を見るのもこれが最後だった。ほとんどが入れ歯でない自分の歯で、祖母はいつもそれがご自慢だった。

私は当直室の看護婦のところへ行き、祖母が亡くなったと告げた。看護婦はがきつで突っかかるような感じの若い女で、青いアイシャドーをぬっていた。

「それはたいへん結構」と彼女は言い、煙草に火をつけた。

母とおばがこの言葉を聞かなかったのがせめてもの幸いだった。

病室に戻った。隅のベッドのところへ行った。老女は目を見開き頭をのけぞらせて動かなくなっていた。すっかり冷たくなっていた。祖母よりも先に亡くなったに違いない。彼女が死んだのに誰も気づかなかった。私たちでさえも。

#### 10月30日

きのう夕方祖母は霊安所へ運ばれた。今朝私と母とで葬儀事務所に行ってきた。祖母のためにと服、サンダル、ロザリオ、十字架を持って行ったが、どれも受け取ってもらえなかった。埋葬の日の朝に持っていかねばならないと言われた。そうしないとなくなってしまうのだそうだ。

それから墓地へ行った。墓掘りの作業をそばに立って見た。寒かった。墓掘り人たちは足踏みしながら言った。

「奥様は何かあっしらに暖を取らせてやろうなんてお考えにならなかつたんですかい」——つまり彼らは要求しているのだ。

私は彼らに煙草をすすめた。

「煙草は煙草だけどなあ、もうちよいと強いのがもらえたらなあ」

明日はウォッカを持って来てやると約束した。

「で、奥様は誰を埋葬するんで？」 墓掘りの1人が母に向かって尋ねた。「お若い方かね、年寄りかね」

「母です」母は無表情に答えた。

「歳はいくつぐらい」別の男が言った。

「80歳でした」母が言う。

「そんなら犬寿を全うしたってやつだ。みんなそのくらいの年まで生きたいと思っても、なかなかあ」 墓掘りはため息をついた。

中年の男性が私たちのそばに立った。明るい色

の背広にネクタイをしめ、コートを着ている。鼻が長く、顔に傷跡がある。金属製の黄色い菊の造花の花輪を手にしている。

「あんたは誰の埋葬だい」 墓掘りたちは今度はその男の方を向いた。

「名付け親のだ」 顔に傷のある男が答えた。

「それで？ 何で死んだんだい」 墓掘り人が好奇心を起こして尋ねた。

「殺されたのさ」 3日前だ。グロフフでね。家に帰る途中だった。夜9時ごろ。あっけなく、こう……」 ここで男は片手で自分の首をつかんでみせた。「彼はその時たった70ズウォティしか持ってなかった。で、犯人どもはナイフで彼の腹を刺した。それから彼を引き起こして、さらに2回刺した、それでおしまいさ。道路ぞいの家の人々は物音を聞いていたが、恐がって門から出て来なかった。人々が出てきた時、彼はもう冷たくなっていったってわけだ」

#### 10月31日

埋葬の日。朝、母とおばと3人で葬儀事務所に行く。母は、係りの太った男に祖母のための服やその他を渡した。

「なんで今ごろ？ 遅いじゃないか」 憤慨して顔を赤くさせながら男が大声で言った。

「だってあなた自身がきのう言ったじゃありませんか、こういう物は埋葬日の朝持って来るようにって」 私が言う。

「ああ、言ったとも。自分の頭で考えろってな。もう間に合うかどうかわからないぞ」 男は叫ぶ。

「いくら払えばいいんです」と私は彼をさえぎった。

「埋葬料は1700、それ以外の分はそちらのお気持ち下さい……」 今度は平静な口調だった。

1800ズウォティを渡した。

しばらくして、服を着せられた祖母の遺体が安置されている部屋に通された。

「十字架は手に持たせる格好にしましょうか？ ロザリオも同じに？」 いんぎんな口調で男は言った。

私たちは棺と同じ自動車に乗って墓地へ向かった。おばは、何か盗まれていないか確かめるため、棺のふたを少しもちあげていた。

そして、ミサ、説教、聖歌、埋葬、献花、悔みのことば。

新しい土を盛り上げた墓の前に立って祖母を思った。家で死にたがっていたのに、とうとう病院で逝ってしまった。地上の地獄のような場所で人生にさよならしてしまった。その地獄を作った連中もいつの日か死なねばならない。せめてものなぐさめは、ほとんどの時間祖母には意識のなかったことだろう。だが、祖母以外の人は？ 他の人はずっと、すべてを見聞きしていたのだ。まだ、それが誰の罪かという問題が残っている。私はこの問題に自ら答えることはしない。ひとつ、私にわかるのは——悪いのが人間たちだということだ。

[訳：高橋初子]

【訳注】名の日……ポーランドの風習では、1年365日、それぞれの日が「聖だれその日」と決められている。人々は誕生日を祝うよりもむしろ、自分と同じ名の聖人の日を自分の「名の日(imieniny)」として盛大に祝う。この話の場合、聖テレサの日が「名の日」といっていることから、祖母がテレサという名であるとわかる。



# 綱領的宣言——12月16日記念日に際して

レフ・ワレサ

Statement-Programme, Lech Wałęsa

text from Coordinating Office Abroad of NSZZ SOLIDARNOSC

【編集部注】以下はL・ワレサが83年12月16日にグダンスクの1970年事件記念碑前で読上げる予定だった声明である。ワレサは何らかの事情でこれが不可能となることを想定して声明文をあらかじめ西側記者に渡してあった。事態は想定どおりとなった。

1983年8月31日、私、レフ・ワレサはわが国で生じている事態について12月16日、グダンスクの記念碑の前で語る約束をした。今日、私はこの約束を果たすと同時に、この録音テープを手にする人たちすべてに対し、レフ・ワレサが12月16日の状況について考えていることを広く知らせるため、これを全世界に広めてくれるよう要請する。

1970年12月に捧げられたこの記念碑は、パンと自由を求める労働者の闘いのシンボルにとどまるものではない。それは労働者の努力を無に帰さないよう未来のための仕事の必要をも想起させるものである。希望の微光がさして——この記念碑の建立——3年たった今日、われわれの家族の生活が脅かされていることを明らかにしなければならない。食糧と健康の問題がわれわれの日々の生活の一部となっている。10年の間に支配者集団は変わり、人民に話しかける方法も変化した。1956年、彼らはわれわれの両手を切り落とそうとした。1970年、彼らは助けを求めた。1976年、労働者の非行が非難された。今日、彼らはバター（11月初め以来配給制になっている）について許しを求めている。食糧価格の引き上げ（1984年初頭に予定されている10～50パーセントの値上げ）後は、彼らはわれわれに何と云うのだろうか。許しを乞う以上、バターやパンはこれ以上ないのだろう。最も困窮した人たちが最大の困難に直面している。家族手当が削減されようとしている。食糧価格の引き上げを正当化するために農民の所得増大について語るのはいさよ偽りである。その目的は農民と労働者の分断にある。経済全体のために、われわれすべてのために、農業援助が今なお必要である。

もちろん、すべてを西側の制裁に帰すことも可能である。しかし、制裁解除が経済問題すべてを

解決しえないのは明白である。とはいえそれは政府には助けとなる。

わが国のこの困難の時にあたって、次々と危機を招来しないためには以下の点が考慮されなければならない。驚くべきことに、わが国の統治者は何も学んでおらず、短期間の相対的自由化ののち、今ふたたび昔の統治方法に戻ろうとしている。

1980年以降、「連帯」運動の枠内において、労働運動のみならず、知識人や農民、芸術家、科学者たちが力をつけた。当局は実力と暴力の行使でこれに応えた。

この2年間、独立組織すべてを破壊する当局の力と、これとは対照的な建設的活動に対するその無能力が実証された。社会的、政治的問題は何ひとつ解決されていない。経済も改善されていない。政治の分野では名称が変わったにすぎない。しかもこうしたことのすべてが社会主義の再建の名の下に進められている。根本問題はこうである。労働者を抜きにして、労働者に逆らって社会主義の建設が可能か。

今日、自由労働組合運動とすべての独立的運動が息の根をとめられている。しかし「連帯」はその理想を捨てたわけではない。次のことが想起されるべきである。

— 自由と人権をめざして闘うすべての人々を結ぶ連帯の考えは放棄されえない。

— われわれの大衆デモンストレーションで犠牲者が出なかった事実は誇りとするにたる。

— キリスト教精神がわれわれを鼓舞する。社会的正義と平等、集団的特権の廃止を求める労働運動の伝統にわれわれは忠実である。

祖国の善は最高であり、民族の伝統に対する忠誠はわれわれの義務である。国家は国民の善に

奉仕する組織であり、特権集団がその利益を守るための道具であってはならない。

まず何よりも国民生活の問題について話したい。わが国再生の出発点は、労働者の偉大な作品、1980年8月の社会的諸協定でなければならない。再生の基本要素はこれら協定の中に盛り込まれている。社会的、経済的領域における独占がわれわれの生活を阻害し、国家行政の機能マヒの原因となっている。

1980年8月の諸協定は現実的な原則に立っていた。国際政治の大きな構造に結びつき、国益を考慮すれば変更不可能な、党と国家の指導的役割は尊重された。それにもかかわらずこれら諸協定は労働者代表の多元主義の原則を承認した。これが労働者の重要な武器となった。だが党はこれを受け入れず、自らの利害に固執した。労働運動に対する党の独占の力による回復が決定された。その結果は誰の目にも明白である。労働運動の多元主義の再建こそがわが国社会、政治体制の直面する最重要問題であることは誰も知っている。

各支配集団による政治的独占は受け入れられない。われわれはあまりにも多く錯誤と偏向に対処しなければならなかった。制御の仕組みを作らなければならない。普通の条件の下では、議会制度が制御の仕組みとなりうる。処方作りは私の仕事ではないが、国民的合意がこの問題を解決するだろう。

社会的、経済的独占は経済改革の実施を不可能にしている。効率的に機能する経済は、次の3つの条件なしには想像もできない。国家的政治的管理機構からの経済管理の分離、管理機構に対抗する独立した強力な社会組織および労働組合の設立、そして企業間の競争、である。労働組合について言えば、8月の諸協定の放棄は不可能である。それが実行に移されているという主張は政治的術策である。自らの独立自治労働組合の結成の権利をから取ったのは、政府ではなく、ストライキにたった労働者であった。それゆえに彼らが自らの行動綱領を作成する。

ところが当局は、80年8月の諸協定のみならず19世紀の資本家のように国際諸条約にも違反してわれわれがそうするのを阻止している。すべての先進諸国で労働組合は強力な社会的力となっている。「連帯」はわが国再生の好機を体現する。これがなければ長期にわたる政治的停滞が続こう。

われわれは誤りを免れない。しかし「連帯」は決して労働組合活動の独占を求めなかった。競争相手として、制御の手段として、われわれには部門別、自立組合（かつては公式の、今は禁止されている）が必要である。彼らとは今でも合意が可能である。その具体例が、1983年5月6日に国会に宛てた労働組合の多元主義を求めるわれわれの共同声明である。

今日新労組に加入している人たちは次の問いに答えてみよ。君たちには他の組合には代表権を認めないで独占的組合に加入する権利があるのか。君たちには仲間を犠牲にして特権を享受する権利があるのか。君たちには労働者の連帯を破る権利があるのか。この機会に私は、自由の身であれ捕われの身であれ、「連帯」の理想に忠実であり続けるすべての人たちに、感謝と尊敬の意を表しておきたい。

労働者自主管理の問題は複雑である。自主管理がうまく機能し、労働者の権利を求めて闘っている工場もあれば、労働者が操られるがままになっている工場もある。希望を失った労働者たちが、自主管理の実施をまったく望んでいない企業もある。しかし自主管理は、改革されたどのような政治制度の中にも存在しうる。自分の企業内の諸条件が自主管理機関の設置を可能としているかどうかを判断するのは労働者自身である。われわれの家族と全ポーランドの運命はわれわれの仕事にかかっている。われわれの運動はいつも立派な仕事を大事にする。われわれが仕事を中止するのは、ただ仕事を誠実で立派なものとするため、その成果が破壊されないようにするためである。

社会的紛争の解決と独立した司法制度。権力機関がその独占を擁護する時、深刻な対立の回避が不可能であることを経験は示している。当局が特定集団の独立を認めない場合、裁判官が果すべき仲裁者、調停者の役割は誰にも不可能となる。経験が示すところによれば、裁判官がこの役割を果すことはめったにない。勇気をもってこの役割を果した裁判官は弾圧の犠牲となってきた。われわれは司法の独立とともに、権威と法的保障を与えられた誠実な裁判官を要求しなければならない。

鳴りもの入りで裁判が開始されたわれわれの仲間たち11名に対し有罪を宣告するに十分な証拠がないとわかると、政府は裁判所も法も素通りして

「人道的」措置——任意の出国——を提案した。当局によって法の外に置かれようとしているわれわれは、たとえその鉄の爪がわれわれに向けられたものであっても、法の順守を要求しなければならない。法は正義を意味しなければならない。まさにこのゆえにわれわれは司法制度と警察に対する可能なすべての形態による統制を要求する。

誠実な対話の実現のためには、すべての当事者がマスメディアを平等に使用できなければならない。人民の主権は国家の主権の保証であり、国家の主権は人民の主権と自由と尊厳の保証である。1970年12月の記念碑は復讐の象徴でも憎悪の象徴でもなく、支配する者と支配される者の合意の象徴である。「連帯」運動は全体としてつねに、ポーランドにおいて人権をめざす平和的な闘いであった。われわれは今も対話と合意に忠実である。まさにこのゆえにこそ、私に授与されたノーベル平和賞は、「連帯」に対して授与されたのだと私は信じる。だから私にはこういう権利がある。ポーランドの愛国者たち、友人たち、仲間たち、ノーベル平和賞おめでとう、と。

今は困難な時である。未来に対するできあいの回答は誰にもない。誠実に生き、思慮を勇気に結びつけ、われわれの理想に忠実でなければならない。いいかえれば、連帯を堅持しなければならない。

1984年、「連帯」の命運は次の4つの問題の精密な分析にかかっている。国家と党機構、自主管理、労働組合、司法制度。当面われわれは、現時点に即応した身近かなプログラムについて作業を進められるにすぎない。権力奪取や当局との戦闘によってでなく、最良のプログラムを選びとることによって、「連帯」の平和的な勝利を実現するために、私自身とわれわれすべてがほかの問題についてもさらに準備できることを期待したい。十分な準備と十分な訓練は勝利をより一層容易にするからである。

1983年12月16日

レフ・ワレサ

[訳：水谷駿]

## 12月16日記念日に関する 「連帯」暫定調整委員会声明

Statement  
on the 16th December Anniversary, TTK  
"Voice of Solidarność" No.77, Dec.21, 1983

13年前の1970年12月、バルト海沿岸で生活水準の大転切り下げに抗議して立った労働者に兵士たちが発砲した。1981年12月、ポーランド南部で市民と労働者の権利を防衛するヴェク錠の坑夫たちに対し砲火と戦車がさし向けられた。

ポーランド社会は、自らの当然の権利のために最高の代償を支払った人たち、すなわち自らの生命を失った人たちすべての追想の日として12月16日を記憶している。しかしわれわれが彼ら死者たちに負っているのはただ追想の日だけではない。彼らの死はわれわれすべてにその不屈の闘いの継続を委ねた。社会がすべての権利を否定され、生活条件がとどまるところを知らず悪化してゆく今日、彼らの大義はその重要性

を一層高めている。

1983年12月16日、喪章をつけて死者たちを追悼し、全国いたる所で平和的デモを組織してわれわれの戦いの意志を表明しよう。みんなして職場を離れ、全国の都市の中心地で行われる行進やデモンストレーション、集会に参加しよう。地方労働組合機構はその地方の伝統と可能性に従って独自の記念行事を提起するだろう。

祝賀行事に介入する試みがなされるならば、これら行事の平和的性格の破壊の責任はあげて当局にあることをわれわれは宣言しておく。

1983年11月26日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会  
ズビグニェフ・ブヤク (マゾフシェ)  
タデウシ・イエディナク (シロンスク・ド  
ンプロフスキ)  
ボグダン・リス (グダンスク)  
ユウゲニウシ・シュメエイコ (ドルヌイ・  
シロンスク)

[訳：水谷駿]

# チェコスロヴァキア自由労働組合準備委員会の声明

Preparatory Committee of Free Trade Unions in Czechoslovakia, "Soridarity" Dec. 1983 pp.5-6

## ポーランド「連帯」の友人諸君へ

「連帯」の不法な解体に抗議して1日のデモとストを準備中の諸君たちに挨拶を送る。「連帯」はごく短期間のうちにポーランド人民の圧倒的多数と世界の多くの人の共感と尊敬をかちとった。

われわれは諸君たちの国の政治的発展を深い関心をもって見守ってきたし、見守ろうとする。その活動に伴う巨大な障害と圧力と犠牲にもかかわらず、諸君たちは必ず自由労働組合の理想を守り抜くだろう。

1968年の改良主義運動の経験から、われわれは民族の将来の民主的、精神的、道義的発展のために持続的な運動が必要であることを知っている。原則に対する持続性と一貫性、そして忠誠は、全国民とともに男女1人1人のものでなければならない。

諸君たちが今知りつつあるように、われわれは政府が原則に対する忠誠よりも個人的な物質的利益を重視していることを知った。真の自由と民主主義の代わりに物質的利益が与えられ、こうして真の社会主義社会の発展は抑えつけられた。彼らの「正常化」は良くても社会の停滞を、悪くすればその衰退と荒廃を意味する。社会の希望に満ちた積極的な真の発展は、硬直した官僚的障害の除去と表現の自由、政治生活への自由な参加によってのみ可能となる。1968年のチェコスロヴァキアの運動が示唆し、諸君たちの運動の発展と拡大が目ざしているのは、まさにこの過程である。

ポーランドとチェコスロヴァキアの自由と独立をめざして共に闘おう。自由を愛するすべてのポーランド人、チェック人、スロヴァキア人は、単に言葉によってではなく、行動を通じて再生の時に向けて前進する。これこそが最も重要なことである。

諸君たちの抗議の日、われわれはこの地で「連帯」の解体に抗議して諸君たちに合流する。

1982年11月7日 プラハとビルゼンにて

## われわれの基本的立場——声明

チェコスロヴァキア自由労働組合準備委員会がその最初の声明を発表して以来やがて1年になる。11月初めにポーランド「連帯」を支持する最新の声明の発表後、国の内外で多くの憶測が生まれた。委員会の活動方針、その綱領、とりわけ委員会の構成員の氏名とそ

れが公表されない理由に関心が集まった。

現在、そして予見しうる将来、委員会の構成員氏名とその活動方法の詳細は公表されるべきではない。これには2つの理由がある。第1。現在のわれわれの最重要な目的は社会的自覚の創出である。国内で評判的となること、知れ渡ることは望まない。われわれの関心はわが国の健全化の可能性にある。憲章77の市民的イニシアティブは高く評価する。しかしその著名者の運命と彼らに対する弾圧は、われわれの警告となる。たとえば、公式にその勇気ある活動は終わったとされている不当弾圧犠牲者防衛委員会(VONS)の轍は踏むべきではない。

大衆運動の登場と発展の条件がない時には、設立声明で述べた方向での準備的、社会的運動に献身する。

第2に、この数年間わが国政府は重要な批判的活動すべてを、自らの不利を意とせず否定的に評価してきたが、それでも、われわれの氏名の公表は、運動を困難にし、その解体を招く可能性が非常に大きい。

われわれは最初の綱領的文書で革命的労働組合運動(ROH、公式組合)の健全化のため、とりわけ職場のその地方組織内であらゆる合法的手段を活用したいと宣言した。ROHを真の勤労人民の運動とし、その日々の、また長期的な利益を守るものとするために規約が提供するすべての可能性が追求される。

こうした合法的手段が失敗し、かつ社会的矛盾の深化が要求する時にのみ、われわれは自らの目標と理想を反映する並行的な独立労働組合運動の登場のために行動する。今日、多くの工場と一部組織の中に、労働組合の活動を批判的に監視し、賃金の停滞や格差、職場の安全、深刻な生産上の問題に関心を抱く、自然発生的に形成された多数の非公式グループが存在する。

こうした活動のすべて、グループのすべては、当分は共通の、同一の関心で結ばれた非公式の細胞として存在、活動できる。その組織的結合はより有利な条件の下でのみ可能である。

チェコスロヴァキアにおける労働組合運動の再生をめざすこうした非公式グループないし個人のすべてを、われわれは直接間接に援助する。

1982年11月14日

〔訳：水谷 駿〕



## 西側労働組合の「連帯」支持声明

Messages from Trade Unions of the West, "Voice of Soridarnosé" No. 74, 1983. 11. 12

〔「ヴォイス・オヴ・ソリダルノシチ」編集部注〕 1983年8月31日のグダンスク協定3周年に際し、世界の民主主義的労働組合からポーランドの独立労働組合「連帯」と労働者階級の闘いに対する支持声明が多数寄せられた。ブリュッセルの独立自治労働組合「連帯」在外調整局は、レフ・ワレサと地下「連帯」指導部、暫定調整委員会に代わり、民主主義的労働組合の「連帯」に対する変わることもない支持と連帯、そして労働組合の諸権利と正義と民主主義を求める「連帯」の闘いに対する理解に心から感謝の意を表明している。以下にこれら支持声明の中からいくつかの抜粋を紹介する。

### フランス

フランス民主労働同盟CFDT、労働者の力CGT/FO、全国教員組合FEN、幹部職員組合CGC、フランス・キリスト教労働者連盟CFTCは、共産主義世界で最初の自由労働組合の公認をもたらしたグダンスク協定3周年記念日に際しての抗議行動に無条件の支持を表明する。われわれ5組合は、1980年8月以降「連帯」に組織されたポーランド労働者階級による労働組合の諸権利と市民的自由を求める闘いはフランスの労働組合運動と共通すると思われる。……民族全体を抑圧する現に進行中の試みを前にしてわれわれ5組合は、独立労働組合を自由に組織する権利が基本的自由に属することを再確認する。戒厳令支配を永続化する新しい弾圧法を非難する。組合の地下指導部とレフ・ワレサが提唱する交渉の提案が考慮されることを要求する。社会的、政治的活動のゆえに有罪を宣告された投獄者全員の釈放を要求する。われわれは何千という人から職と教育的、芸術的、科学的営為を奪った制裁の解除を要求する。われわれは、正義と尊厳と自由を求めて3年前に開始された闘いを継続する「連帯」に対し、われわれの連帯を再確認する。われわれ5組合は「連帯」の理想を支持して今後も活動を続ける。フランスの労働者と人民に対し、ともに闘うことを呼びかける。

### オランダ

オランダ労働総同盟FNVは、グダンスク協定3

周年記念日にあたり声明する。「連帯」を非合法化した1982年10月8日の法律にもかかわらず、「連帯」はその存在をやめなかった。FNVは今も「連帯」がポーランド労働者の代表だと考えている。組合の権利と民主的諸権利を求める闘いの中でポーランドの友人たちが強くなることを望む。不法な法、国際的規範に違反する法は、民主的労働運動を粉砕することも、党が支配する新しい組合を作ることもできない。戒厳令解除は事態を改善していない。……組合と政治犯に対する恩赦は部分的にすぎない。FNVは政治犯の全面恩赦を政府が約束するよう求めたTKKとレフ・ワレサの訴えを支持する。政府と「連帯」指導部の真の対話を改めて要求する。ポーランド当局が国民的合意の道を選ぶよう強く訴える。このような合意が成立すれば、われわれは東西両陣営が参加する対ポーランド経済援助計画の実施を要求する。……FNVは今後もポーランドと全世界における民主的な独立労働組合運動を支持し続ける。

### イタリア

イタリア労働組合総同盟CGIL-CISL-UILは、1980年8月のグダンスク協定の実施をめざして政府当局と労働人民の交渉を開始しようとする諸君の努力を支持する。イタリアの労働人民は自由と組合多元主義を求めて闘いを進めるポーランドの労働人民との真の連帯を表明する。経済的、社会的、政治的諸問題は社会的支持と対話、交渉なしには解決不可能である。イタリア労働総同盟は諸君たちと「連帯」に対する兄弟的支持を確認する。

### ノルウェー

ノルウェー労働総同盟LOは、8月31日3周年記念日にあたり、ポーランドの独立、民主的労働組合運動に対する支持を再確認する。かつてLOは、「連帯」を支持し、ポーランド軍政当局によるグダンスク協定の侵犯と戒厳令体制を非難する声明を発表し、ポーランド大使に抗議書簡を送り、ヤルゼルスキ將軍に抗議電報を打った。政府当局と労働者代表の責任ある対話なしにはポーランドの状況は解決されない。LOは、ポーランドの労働組合がその将来の仕事において最大の成功を収め、ポーランドの諸問題が早期に解決されることを願う。〔訳：水谷 駿〕

し、ドメラツキ法相によれば、戒厳令布告以来9ヵ月間に150人の判事が辞職したがその大部分はより高い収入を求めてであり、「良心の呵責」によるものではないという（「連帯」筋によれば戒厳令下で辞職した判事の数は900人に達するという）。

12月15日 ヴロツワフで「連帯」支持者数千人のデモを警察が解散させる。ラジオによれば全市で14名の「連帯」活動家が逮捕されたという。ウルバン政府スポークスマンはポーランド人記者との会見で、値上げの最終決定は（新）労組と協議のうえで行われると語る。

12月16日 1970年12月事件記念日のこの日、第1報によればヴロツワフ、チェンストホヴァ、ウルスス、エルブロンク、ワルシャワ、ピアウイストック、グダンスク、ポズナンでデモ。外国人記者の報道によれば、大量の警察の動員と極寒の気候が大々的なデモを妨げたという。この日ワレサは姿を見せず、代わってダヌタ夫人が記念碑に献花。西側記者の手を通じてワレサの声明が全世界に伝えられる（本誌18頁以下に全文掲載）。この日政府は食肉その他食料品の配給制を84年も83年と同じ水準で続けることを決定する。公式報道によれば「農民連帯」指導者の1人ミハウ・バルトシチェがピドゴシチで白首したという。

12月20日 ウルバンは外国人記者団との会見で、16日の事態について「地下からの呼びかけは支持を得られなかった。この日逮捕されたのは全国でわずか2人にすぎない。チェンストホヴァとヴロツワフで放水銃が使われたが、その他では物理力はいっさい必要でなかった」と語る。

12月21日 キシチャク内相は政府新聞「ジェチボスポリタ」とのインタビューで「一般犯罪と経済犯罪が増えており、いろいろ、公共財産の浪費、青少年の非行、アルコールの乱用と麻薬、暴力行為、公共財産の破壊などが広がっている。新設の法律・公共秩序・社会規律委員会の任務はこれらと闘うことである」と述べる。

12月22日 クラシンスキ物価相によれば、どの値上げ案にも明確な支持が得られないため、値上げの最終決定はまだ不可能であるという。ワレサ、29日に警察に

出頭するよう命じられるが理由は明らかにされていない。12月23日 グジェゴシ・ブシェミク事件（83年5月12日に逮捕され14日警察で死亡したワルシャワの高校生）に関連して警察官2名、医師2名、救急隊員2名が起訴される。ブリュッセルのECスポークスマンは、ポーランドの戒厳令に抗議して83年3月から実施されていた対ソ経済制裁を83年12月末で解除すると発表。

12月24日 ローマ法王はポーランド人巡礼者と会見し、「ポーランドが平和の地となり、人間の権利と尊厳が尊重される国となることを望む」と語る。グダンスクの聖ブリギダ教会のクリスマス・イブのミサに数千人の信者が集まり、ワレサと「連帯」支持を表明する。

12月25日 ワルシャワの聖スタニスワフ・コストカ教会に集まった1万2000～1万5000の群衆を前に、ポビェウシコ神父は自由と正義を要求し「平和の基礎は真実と正義である」と説教する。

12月26日 グレンプ枢機卿によれば教会の仲介によりクリスマスの日に30人の政治犯が釈放されたという。枢機卿はまた「連帯」7人とKORの4人についてもその釈放を交渉中であると語ったという。ワレサはフランスの日刊紙「ル・マタン」とのインタビューで、「自分とTKKとの間に対立はない。TKKの過ちは非難しない。彼らの活動を評価したい。この12月16日が失敗だったとは思わない。ポーランド人は平和的闘争を支持し、暴力の行使に反対である。街頭行動が何か結果を生むとは思えない。ほかにも闘争の形態はある」と述べる。

12月28日 PAPによれば、ポーランド経済諮問評議会議長バプロフスキ教授は「食糧品価格の値上げは必要だが、政府案には重大な欠陥がある。……最も重大な欠陥は特に低所得世帯の生計費の大幅な上昇をもたらすことである」と述べる。

12月29日 ワレサはグダンスクの警察本部に出頭し、TKKとの会談（11月19、20日）について2時間におたり尋問を受ける。ポーランド国会が開催され84年の経済計画と予算案を審議し承認する。

[編：水谷駿／渡辺光一]

## 編 集 後 記

☆1月1日から実施が予定されていたポーランドの食料品価格引き上げが各方面からの反対のため延期を余儀なくされました。相談を受けた官製新労組でさえ反対を表明せざるを得なかったほど、値上げに対する労働者、市民の抵抗は強かったようです。結

局値上げは上げ幅を縮小して近く実施の予定とありますが、これに労働者がどう反応するか、予断を許さない状況が続いています。

☆「連帯」カレンダーに多数の注文を頂きありがとうございました。品切れのため多くの方々にご迷惑をおかけした。現在ブリュッセルに追加注文を出していますが、在庫があるか否か不明です。（み）

「ポーランド月報」既刊号目次

第14号 1983.5.10 24頁 400円

経済危機と戒厳令 K・カリンスキ……………2  
 街のユーモア……………5  
 独立社会の理念 D・ワルシャフスキ……………6  
 「連帯」がめざす自治共和国〔上〕  
 ——週刊「連帯」インタビュー……………8  
 死ぬために蜂起した人々——1943年4月 ワルシャワ・  
 ゲットー蜂起 —— M・エゲルマン……………14  
 KORの5人——プロフィール……………20  
 ポーランド日誌 (1983.3.11~4.7)……………23

第15号 1983.6.7 24頁 400円

法王さまを待ちながら J・P……………2  
 ローマ法王ヨハネ・パウロ2世への手紙  
 「連帯」暫定調整委員会……………5  
 ローマ法王を迎えるにあたって (要旨)  
 ポーランド司教会議……………5  
 教会の二度目の沈黙 (上) A・ブザンソン……………6  
 「連帯」の7人——プロフィール……………10  
 「連帯」在外活動の現状——梅田芳穂氏に聞く……………14  
 「連帯」がめざす自治共和国 (中)  
 ——週刊「連帯」インタビュー……………16  
 黒い笑い……………18  
 素顔の「連帯」指導者たち (3) J・リティンスキ  
 梅田芳穂・談……………20  
 イモのステーキと店頭に溢れる花——ワルシャワ  
 印象記—— 筑紫恵……………21  
 ポーランド日誌 (1983.4.8~5.15)……………22  
 黒人労働者に連帯し、ポーランド人難民の南ア移住に  
 反対する 「連帯」在外調整局声明……………24

第16号 1983.7.7 28頁 400円

「行動と言葉は記録される……」1976年6月  
 J・ヴァルツ……………2  
 素顔の「連帯」指導者たち (4) S・ヤヴォルスキ  
 梅田芳穂・談……………7  
 ラドム 1976年6月25日 M・ホエツキ……………8

奇怪な裁判——KORの何が裁かれるのか

A・スタインスベルグーヴァ……………11  
 教会の二度目の沈黙 (下) A・ブザンソン……………14  
 「連帯」がめざす自治共和国 (下)  
 ——週刊「連帯」インタビュー……………18  
 立ち止まることなく進もう Z・ブヤク  
 (「週刊マゾフシエ」インタビュー)……………24  
 ポーランド日誌 (1983.5.16~6.2)……………27

第17/18号 1983.8.6 36頁 500円

組合結成は労働者生得の権利である  
 ——カトヴィツェにおけるローマ法王の説教……………2  
 「連帯」暫定調整委員会声明  
 ローマ法王の祖国訪問を終えて……………4  
 予想される戒厳令の解除について……………4  
 組合複数制の即時実現を  
 ——各種労働組合共同声明……………5  
 ふたつの祖国、ふたつの愛国主義——ポーランド  
 人の民族的誇大妄想と外国嫌いに關する考察  
 J・J・リブスキ……………6  
 労働者階級とともに——ある知識人の軌跡  
 S・バランチャク (インタビュー)……………24  
 ワルシャワ裁判に反対する委員会のアペール……………33  
 れんたいニュース……………34  
 ポーランド日誌 (1983.6.3~6.30)……………35

第19号 1983.10.5 28頁 400円

1956年——スターリンの死から「10月」へ  
 J・スクジンスキ、P・プロジナ……………2  
 分析と展望 ——獄中よりの手紙 (上)  
 A・ミフニク……………12  
 官製労組：その実態と現状  
 ILOに対する「連帯」報告書……………20  
 平和運動に関する報告  
 J・ミンキェヴィチ、J・ピラルスカ……………24  
 W・ハルデクの「白首」について  
 ——「連帯」在外調整局声明……………25  
 戒厳令の解除とグダンスク協定3周年  
 「連帯」暫定調整委員会文書……………26  
 ポーランド日誌 (1983.7.1~8.4)……………27

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F  
 電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069  
 定価400円・年間定期購読料5000円(送料共)

ポーランド月報 一九八四年六月五日発行(毎月一回発行)

文献・資料サービス No.14

- ★ 文献・資料サービスはポーランド資料センター会員を対象としたサービスです。近着の外国語文献を会員の方にも御利用いたってこういうものです。
- ★ この目録に、文献の目次だけを訳して載せてあります。ご希望のものがおありでしたら、郵便振替用紙裏面の通信欄に
  - ① 資料タイトル、号数、何語版かの別
  - ② 目次タイトル、頁数
  - ③ 必要部数
 をご記入の上、代金をポーランド資料センター（振替 東京2-81069）へお振込下さい。

【例】

通 信 欄	
・文献・資料サービスを申し込みます	
① Solidarność Biuletyn D'Information 70号	
フランス語版	
② 地下の政治的運動法	11P - 15P
③ 1部	

- ★ 代金は次のとおりです
  - ・コピー代：1ページにつき30円×枚数合
  - ・送料：4ページまで 60円 20-55ページ 240円
  - 5-10ページ 70円 56-110ページ 350円
  - 11-19ページ 170円
- ★ 再コピーしての第三者への譲渡・転売等にはご遠慮下さい。
- ★ この目録に掲載されてない資料もあります。ご相談下さい。
- ★ 目録のバックナンバーからでも注文できます。また、一資料まるごとの注文も可能です。
- ★ 目録中、目次の頭に付している★は『ポーランド月報』に邦訳掲載がみ、☆は掲載予定をあらわします。

# Uncensored Poland News Bulletin [英語]

◎ No 23 1983. 12. 8

1. 日誌 11.25-12.8 ----- 3-8
2. 「連帯」文書
  - 2a. ワレサ・TKK共同声明 83.11.20 ----- 8
  - ★ 2b. 12月16日記念日に因するTKK声明 83.11.26 ----- 8-9
3. レフ・ワレサ
  - ★ 3a. インタビュー 「われわれは勝利する」 ----- 9-14
  - 3b. 西側の制裁問題に関する記者会見 83.12.5 ----- 14-15
  - 3c. 政府スポークスマンの発言 83.12.6 ----- 15-16
  - ★ 3d. 在外調整局声明 83.12.6 ----- 16-18
4. ポーランド国会 1983.12.5 ----- 18-19
5. 教育と文化
  - 5a. 政府の見解 ----- 20-21
  - 5b. 作家組合とポーランド・ペンクラブ ----- 21-23
  - 5c. 硬闘に関する統計 ----- 23
  - 5d. 映画製作者 ----- 23-24
  - 5e. 大学での生活 ----- 24-32

◎ No 24 1983. 12. 29

1. 日誌 12.9-12.29 ----- 3-13
2. ワレサのノーベル平和賞授業式 オスロ 1983.12.10-11
  - 2a. エグリ・アールヴィクの演説 12.10 ----- 13-17
  - 2b. ワレサの答辞. グヌタ夫人代読 12.10 ----- 17-18
  - 2c. ワレサの講演. ツィヴィンスキ博士代読 12.11 ----- 18-21
- ★ 3. レフ・ワレサの綱領 ----- 22-26
4. 教会=政府関係
  - 4a. グレンア枢機卿のクリスマス・メッセージ 1983.12.19/20 ----- 26-27
  - 4b. クリスマスに際しての政治犯の釈放 ----- 27-28
  - 4c. グレンア枢機卿とワルシャワの神父たちとの会合 12.24 ----- 28-29

## 5. 経済

- ★ 5a. 値上げ反対理由に関するTKKの声明 ————— 29-33
- 5b. 地下紙からの経済関係記事 ————— 33-36
- 5c. 公式紙の経済記事 ————— 36-37
- 5d. ポーランド経済: ロンドンからの分析 ————— 37-39

## Solidarność . Bulletin d'Information [フランス語]

◎ No 78. 1983. 12. 14

- ワレサのノーベル賞受賞講演 (ツイヴィンスキ代読) ——— 3-5
- TKK文書
- ★ 12月16日記念日 ————— 6
- ★ 値上げ反対闘争の原則に関する宣言 ————— 6-11
- 地下の2年間 Z. アヤクのインタビュー ————— 11-13
- 「不満と相異」(地下紙論文) ————— 13-15
- 「連中は恐れている」( ) ————— 15-16

◎ No 79 1984. 1. 4

- ★ • ワレサの綱領的宣言 ————— 3-4
- 「バターは高いが、総司令官は…」 D. ワルシャフスキ ——— 5-7
- 人民ポーランド軍
  - 社会に対する将校集団の公開状 ————— 8-9
  - KOSの声明 / 解説 ————— 9-10
  - 軍人評議会の声明 ————— 10
- 各地企業の自主管理 ————— 11-13
- 国外移住 — 私は監獄をとる (H. プエツ) ほか ——— 14-15
- 愚かさとは名誉の証明 A. ミフニク ————— 15-16

◎ No. 80 1984. 1. 18

- 12月16日記念日 クラクフ / ノグワタ / ガコパネ 他 ——— 3-4
- 工場で: 「週刊マゾフシェ」工場情報部長のインタビュー ——— 5-7
- 「オーヴェルの再生」(地下紙論文) ————— 7-8

- ・ 危険な兆候 ガロツワフ、グデニ了地 ————— 8-9
- ・ 政治犯の問題 ————— 10-11
- ・ 裁判の状況 ————— 11-12
- ・ 不服従：全国各地の政治犯の関心 ————— 12-16

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1984年

2月号  
(通巻23号)

400円

# ポーランド月報

KOMENDA WOJEWODZKA  
MILICJI OBYWATELSKIEJ  
w Krakowie  
Poczt. 441 Kraków  
18 L. G.

## DECYZJA NR 87 o internowaniu

Uważa, że powstawaie na wodności obywatela

nazwisko i imię GRYWALCZ EBYLUT  
imięna rodziców Nieczyński i Eugenia  
data i miejsce urodzenia 4.05.1934 Kraków  
awant (zakład) i miejsce pracy zakład SPAP - plastik  
miejsc zamieszkania Kraków ul. Sławkowska 21/1

względem bezpieczeństwa Państwa | przesłał publiczności przez to, że  
data |  
określenie |

na zasadzie art. 42 dekretu z dnia 12.12.1981 o ochronie bezpieczeństwa  
Państwa i porządku publicznego w czasie obowiązywania stanu wojennego

postanawia się:

1. internować ob. GRYWALCZ Ebylut  
24 Wolska Wrocy  
i umieścić go w ośrodku odosobnienia w 44-1000-1000-1000
2. wykonać decyzję słupek



KOMENDANT WOJEWODZKI MO

*[Handwritten signature]*

*Kochan* ... *12.12*



## III ポーランド月報1984年2月号目次 III

今日の綱領(上) ..... 3 グループ「グウォス」	12月16日記念日に関する「連帯」暫定調整 委員会声明 ..... 20
病院なんかで死にたくない ..... 10 ——祖母の看病日記より—— R・ドンブロフスキ	チェコスロヴァキア自由労働組合準備 委員会の声明 ..... 21
綱領的宣言——12月16日記念日に際して ... 18 L・ワレサ	西側労働組合の「連帯」支持声明 ..... 22 ポーランド日誌 ..... 2・23

### 【表紙】

クラクフの一活動家に対する拘禁令状。「この者は有害な虚偽の情報の流布により周囲の人々に悪影響を及ぼしたパニックを引き起こす恐れがあり、この点において国家の安全と公秩序を脅かすと考えられるため」拘禁する、といった内容である。日付は1981年12月12日(戒厳令布告前日)、署名はクラクフ県警察長である。

## ポーランド日誌

1983年12月9日～29日

[資料延着のため83年11月24日～12月8日までの日誌は次号以降に掲載の予定]

12月9日 ダヌタ夫人、ノーベル平和賞受賞式にオスロへ向かう。オスロでの記者会見で、「受賞が1982年だったらと思う。レフ(ワレサ)の釈放が早くなっていただろうから。平和賞はポーランド労働者と平等の権利を求める闘いのすべてに与えられたものだ。……賞金は教会の個人農基金に寄付する」と語る。この日ヤルゼルスキはポーランド陸軍参謀総長兼国防次官にJ・ウジツキ将軍を任命。

12月10日 ダヌタ夫人、ワレサに代わってノーベル平和賞受賞式に出席。ワレサ、グダンスクの聖ブリギダ教会のミサに参加。5000人の支持者を前に「われわれの理想」の勝利のために祈ろうと呼びかける。ラコフ

スキ副首相はグダンスクの造船所の党組織の会合で、「1970年12月事件記念日を緊張を高め、国民を分裂させ、混乱の種をまき、国民を政府に敵対させるために利用しようとする試みに政府は反対である」と述べる。12月12日 ダヌタ夫人、ワルシャワに帰る。迎えにきたワレサとチェンストホヴァへ向かう。ワルシャワの聖スタニスワフ・コストカ教会のJ・ポビェウシコ神父が地下活動に関与した疑いで喚問、ひと晩拘留される。このためグレンプ枢機卿は予定していた旅行を延期。この日去る12月2日の布告で予告されていた法律・公共秩序・社会規律委員会がキシチャク内相を委員長にして発足。委員会は法と秩序の完全順守を保証し、経済犯その他違法行為に対する効果的闘いを促進し、国益を守ることを任務とするという。

12月13日 ワレサ、チェンストホヴァのヤスナグラ修道院で国民にノーベル平和賞のメダルと賞状を奉納。グダンスクへの帰路、ワレサの乗った車は13回警官に停止を命じられる。

12月14日 ワレサはかぜのためグダンスク警察の喚問に出頭不可能に。医者から6日間の療養を命じられる。

# 「今日の綱領」 (上)

——グループ「グウォス」

〈Głos〉 - Program bieżący

Biuletyn Informacyjny nr.72 (28.09.83), Paris

【編集部から】 「ポーランド人民軍は祖国を外敵から守る代わりに自国の国民に対する憲兵と抑圧者に成り果てた」——これは、ポーランド人民軍 (LWP 1944年7月21日、人民軍AL) とソ連国内で結成されたポーランド軍が合同して生まれた現在のポーランド国軍のもととなった軍隊) 創立40周年を迎えて、1983年9月20日にポーランド軍将校のグループが国民あてに発表した公開状の一節である。これに対して政府スポークスマンのウルバンは「ポーランド軍の将校たちが国民あてに公開状を書いたとかいうのはうそだ」と記者会見 (83年10月25日) で述べているが、この公開状に発表の場を提供した社会抵抗委員会KOS (KOS 40号83年10月9日付) の編集部によれば、具体的な数字は明らかにされていないが「かなりの数」の将校が署名しているという (KOS 43号83年11月20日付)。これに先立つ83年7月にシチェチンの2つの守備隊で「兵士評議会RŻ」が結成され、WRONaに対する戦いを兵士に呼びかけた政治宣言が発表された (シチェチンの地下雑誌「オプラス (姿)」83年8月号)。

「連帯」の合法活動の期間中で活動の最も別い部分が軍に対する働きかけであったろう。それが最近になって軍隊内部に兵士・将校の自立の動きがあるらしい。こうした状況との具体的な関連は不明であるが、軍の役割に重点を置いた新しい綱領がKOR系の地下雑誌「グウォス (声)」で発表された (「グウォス」83年5/6月特別号)。

この綱領は3部からなり、全体は「ポーランドの政策」と題され、付録として1982年2月12日にマドリードで開かれたヨーロッパ安全・協力会議の席上、パチカン代表によって読みあげられたポーランド問題に関する声明がつけられている。第1部は、ヨハネ・パウロⅡ世が1979年にポーランドを訪問した際の言葉を集めた「芽ばえ」。第2部は「原則」と題されている——「……ポーランドはキリスト教を基盤に持つ西ヨーロッパ文化圏に属する。キリスト教は共産主義イデオロギーの敵である。ヨハネ・パウロⅡ世は現代世界における共産主義ロシアに対してポーランド・カトリックの力を指し示した。しかし決定的な意味を持ったのは「連帯」の成長、発展、継続である。ロシア人たちは正當にも「連帯」の力の源泉を教会のなかに見い出した……。同時に「連帯」はカトリックの持つ、社会秩序を確立する能力を明らかにし、共産主義に代わる現実的な対案を提出した……。ポーランド人はヨーロッパの政治地図を塗り変えるつもりはない。今日ではヨーロッパ中部および東部の人民が全体主義の経験を共有し、バルチック沿岸諸国、白ロシア、ウクライナの国民が目覚め、この地域の諸国民の合意が60年前よりもはるかに現実的になっている。それでもなお、そのようなプログラムを今日のポーランドの政策に据えるわけにはいかない。もっとも、ポーランド国家がみずからの政策を実行できる時がくればそうなるのは物事の道理であるが。……中部ヨーロッパの再生とこの地域にある諸国家の独立、それがヨーロッパの平和 (あるいは世界の平和) にとっての条件である」。

第3部が以下に紹介する「今日の綱領」である。誌面の都合で全部は紹介できないため、「連帯」バリ通信編集部のまとめたテキストをそのまま訳出した。

## 【「連帯」バリ通信注】

地下の政治的流れの3番目として〔1番目は「自治共和国クラブ宣言」（81年11月）の流れを受け継ぐ「自由・公正・独立」設立運動（83年5月1日に政治宣言発表）、2番目はポーランドの民族主義（ただし「外国嫌い」の要素を排除）と左翼の伝統を共に受け継ぐ「国民連帯会議」（83年4月1日発足）——「連帯」バリ通信70号83年8月25日付で紹介〕、雑誌「グウォス」を中心とするグループが発表した綱領を紹介する。「グウォス」は1977年、労働者防衛委員会（のちの社会自衛委員会＝KOR）に関係していたグループにより発刊された。これは、80年8月以前に現われた検閲外雑誌のうちで最も興味を惹かれるものの1つである。グループ「グウォス」のリーダーは（誰にも異論のないところであろうが）KORのメンバー、のちに「連帯」の専門家となり、長いあいだ地下に身を隠している（収容所から脱走）アントニ・マチュレヴィチである。

「今日の綱領」は「グウォス」の特別号（83年5/6月）で発表された。原文はあまりに長大であるため、ほんの一部だけを以下で紹介する。

### 国家の再建

——「綱領」執筆者たちの立てた基本課題は、現在のポーランドに存在する国家構造の規定である。そこから引き出された答えをもとに、かれらは独立運動の追求を提案する。それは、自由で独立したポーランドのために為すべき仕事は、常に、国民に押しつけられた現存の国家制度の枠内で行われなくてはならないという理由からである。「綱領」はいくたびも分割の歴史に言及する。

……武力により独立をかちとろうとした国民の努力、また、将来の独立運動のための経済的、社会的、政治的基盤を用意しようとした努力も、さらには、それらがまっさきに掲げた課題、すなわち、さまざまに理解されてはいたものの、ポーランドがポーランドを所有するという状態を守ろうとした努力も、実際にこれらが実を結んだのは、

占領者に押しつけられた国家の存在を利用した時であった。これが独立獲得の重要な要因の1つだった……。

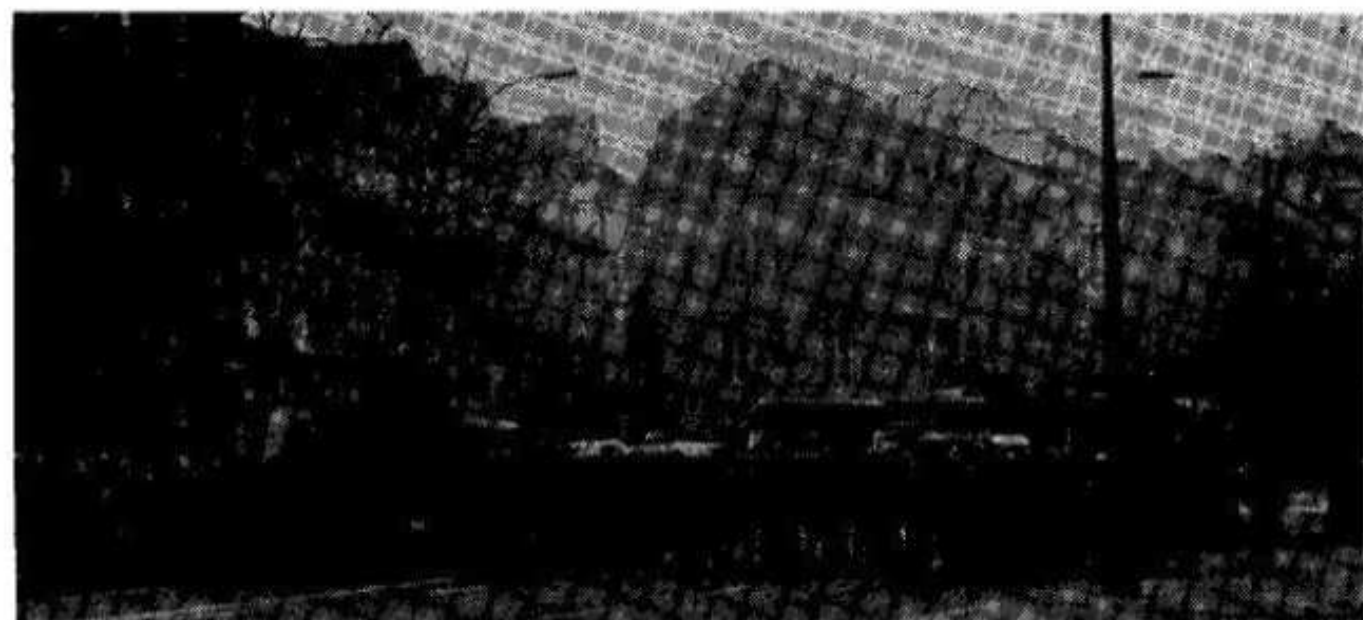
——戦後、共産主義者たちによってつくられた体制は、独立闘争やポーランド国民の生活、経済活動、政治活動にはなんら利するところがなかった。

ポーランド人民共和国とはポーランド国家の残骸であり、歪められた国家形態であり、それは何よりもまず、党国家である。ソ連や他の人民民主主義国家の特徴は、共産党——モスクワによって集中管理される分派の1つ——がその国で「指導的役割」を効果的に果せるようにつくられ、組み立てられた国家であるという点にある……。

ポーランド人にとって国家そのものはこれまで高く評価され、つらい犠牲を払って戦いとった財産であったし、現在もそうである。1945年にわれわれは国家を受け取ったが、それは多くのポーランド的特質を備えていたものの、同時に国民に対する戦いの武器でもあった。……言葉を変えれば、ポーランド人民共和国は、1956年に出現した形態においてさえも、前述の「汎国家戦略」の適用にはまったく不向だったのだ……。

——「連帯」の合法活動期間とその後のクーデターがこの状況を根本から変えた。

はっきりと言おう。「連帯」合法活動の期間は党国家としてのポーランド人民共和国崩壊の時期であった。「連帯」が、そして独立性が、一党独裁体制の心臓部へ、共産党の独占する国家構造の深奥部へはいりこんだ。グダンスク、シチェチン、ヤストシェンビェ、カトヴィツェの合意書調印という事実を前にしては「連帯」をただちに亡きものにするのは不可能であり、統一労働者党と党国家はしばらくのあいだポーランドの独立性と同居せざるをえなかったのだ。その結果が共産党の目に見える崩壊であった。党崩壊の原因は分派闘争だけではない、党が自分でこしらえた国家を統合する役割を放棄してしまったことにこそ主要な原因がある。戦後史上で最も深刻な経済危機と最大の政変であったにもかかわらず、社会生活の基本をなす諸制度はその場しのぎの状態が16ヵ月間もずっとつづき、それに対して党機関はなんら積極的な手をうとうともせず、挑発ともめごと起こし（党内のみならず、政府と「連帯」の間にも）



に明け暮れていた。統一労働者党は党国家構造の統合機能を果せなくなり、みずからの課題遂行を放棄した。劇次的な課題、すなわち、社会の基本的欲求の充足に党は保障を与えられず（「特選ソーセージ」の水準でさえもそうだった）、第1の課題、つまり、ソ連の利益擁護さえも放棄し、みずからの崩壊を前にしてはソ連の立場を代弁することもできなかった。統一労働者党はしだいに誰にとっても必要でなくなっていった。

党国家の崩壊は統一労働者党が政治的な指令センターとしての役割を失ったことと関係がある。この過程はヤルゼルスキ将軍が首相に任命された瞬間から始まった。ヤルゼルスキが軍隊の機構と自分の一派を利用して統一労働者党の組織とは比較的関係の薄い実際上の権力中枢をつくりあげるであろうことは明白だった。それを証明するのが彼の行った人事決定、それに「何よりもまず」組織上の工作であった。

「構造的」（とここでは名づけておく）にとらえたこれらの現象は党国家崩壊の過程をなしている。最近の政治的諸事件をふまえてみれば、ヤルゼルスキ将軍とその一派の活動が1981年12月13日へ至る段階を準備したと言える。この活動の目的は党国家再建でもなく、また、これまでの権力執行方法の破産という事実から引き出された結論をもとにしての新しい形の国家創造でもなかった。このことは、一派の有名人の1人、M・F・ラコフスキが（戒厳令初期にオリアナ・ファラチとのインタビューで）明瞭かつ適切に語っている——「党は崩壊し、精神的にも政治的にも破産した。

党には社会を組織する力も国を危機から救い出す力もない、いわんや国家の防衛などできるはずもない……」。

……われわれに押しつけられた国家の形態とメカニズムに対しては、そこに住む国民として一連の根本的な疑問がある。とりわけ、現実にはポーランド国家がわれわれにとって不可欠な今日ではそうである——国家なしに荒廃した経済の建て直しはできないし、国家なしにこれからの国際関係の危機においてポーランド人の利益を守ることは難しいのだ。1980年8月と1981年12月は、党国家が成立して35年を経てはじめて、国家の問題を目の前の基本的課題として全国民に差し出した——今日、ポーランド人民共和国はいまなお党国家なのか？

1981年12月13日早朝、「連帯」だけでなく、他の自立した（あるいは党に従属する）機関、組織、社会団体も活動を停止させられた。事実上の停止はまた統一労働者党をも襲った。もつともそれは党規約の停止という表現をとったが、ヤルゼルスキの一派は党のすべてのポストを上から任命する制度を導入して統一労働者党を臨時政権の管轄下に置いた。党機関で大量の人事異動が行われ、それは「水平構造」の活動家たちにとっても、「党プロパー」にとっても同じような打撃を与えた。……WRONaが攻撃を加えたこれらグループには、政治的にはまったく異なる立場であったが、1つの共通の特徴があった——どちらも共産党の円滑な活動を願い、行動を起こす時には必ず統一労働者党を通じての行動になるはずだったのだ。